



Title	幼児とともに「課題」を受容する保育者の実践知：専門性論議における「生活の共同生成」の定位 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	及川, 智博
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第15329号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/89435">http://hdl.handle.net/2115/89435</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	OIKAWA_Tomohiro_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：及川 智博

主査 准教授 川田 学  
審査委員 副査 教授 宮崎 隆志  
副査 准教授 伊藤 崇  
副査 准教授 田中 浩司（東京都立大学）

### 学位論文題名

幼児とともに「課題」を受容する保育者の実践知  
— 専門性論議における「生活の共同生成」の定位 —

本論文の独自性と意義は、保育者の専門性研究が前提にしてきた「問題解決」という枠組みを相対化し、新たに「生活の共同生成」を専門性の中軸に位置づける論理を構築した点に集約される。1989年幼稚園教育要領改訂以降、一斉指導技術から「幼児理解」に専門性論議が移る中、認知的アプローチと状況的アプローチという2つの専門性研究の潮流が生まれた。前者は仮想事例をもとに保育者の思考様式をモデル化し、後者はより具体的な文脈における身体レベルでの幼児理解の様相を記述しようとするものとして対立するが、著者によれば両者には保育を「問題解決」と見なす共通前提がある。「問題解決」は、心理学の古典的パラダイムであり、専門性を実証的に検討するには強力である。確かに、怪我やアレルギー対応のように、保育実践には因果的な認識が妥当な問題もあるが、むしろ直接的・即時的な解決が期待できない問題も多い。

後者を保育実践の本質規定に統合するために、著者はNewman & Holzmanの「道具と結果方法論」を援用し、保育における「問題」枠組みを2つに区分した。既存研究の多くが前提とするのは、「トラブル」としての問題に「対処」し「解決」するという「問題解決」の枠組みである。これに対し、すぐには解消できない「課題」としての問題を「受容」しつつ、生活全体への「援助」を進めていくという「生活の共同生成」の枠組みが立てられた。「問題解決」論の限界は、そのみでは専門性を断片的な保育技術に解体する可能性を孕み、保育者の「唯一性」を危うくする点にある。「生活の共同生成」論の提示は、技術的合理性を超えて、幼児と共に不確定の未来に向けて実践全体に責任(responsibility)を持つ保育者の専門性を措定すると説く。本論文は、主流となってきた専門性研究の構造と限界を詳らかに展

開しており、当該分野の後続研究に大きなインパクトを与えるものと評価できる。

以上の理論枠組みの下で 3 つの調査研究が用意された。研究 1 では“クラス替え”に関する保育者の論理が検討され、「課題」は無い方が良いのではなく、むしろ保育者は「課題」を活用してクラス替えを構想し、保育の手がかりを得ていた。研究 2 では“親密すぎる二者関係”の事例を軸とするビネット法により、保育者は仲間関係の「課題」そのものに対処するのではなく、保育活動全体の充実・発展に向けた援助を通して、「課題」が問題でなくなっていく展望を有していることが示された。2 つの研究から、「問題解決」論では見逃されがちな保育者の専門性に光が当てられている。更に、年長児のリレー活動における勝利至上主義的価値観の生成と変容のプロセスを追った研究 3 により、保育者もまた「課題」を生成する主体であることが示され、「生活の共同生成」という概念に内実を与えている。

以上を踏まえ、著者は、保育者の専門性を捉える第 3 の研究視角として「物語的アプローチ」を提起し、その構成要件となる「課題の連鎖性」と「約束」という 2 つの概念を挙げた。「課題の連鎖性」は、著者が「保育的時間」と呼ぶ、一定の計画や見通しを持ちつつも、具体的な状況・文脈に応答して幼児と保育者が活動や環境構成を共同生成していく時間の流れによって担保される。「問題解決」論の想定よりも複雑な課題の連なりとして実践を捉え、そこに保育者がどう関わり、「生活の共同生成」の物語が描かれるかを問う。「約束」は、Arendt, H. の概念の援用で、本論文では「計画」と「援助」を架橋する役割が期待されている。たとえ保育者を幼児との「生活の共同生成」者と規定したとしても、公的教育の担い手としての側面は消えず、何らかの保育計画を必要とする。「計画」と「援助」を結びつけるには、保育者と幼児との間にどう対話が成立し、合意がすり合わされ得るかが焦眉の課題になるとし、著者はそこに「約束」概念の可能性を託している。

本論文は、保育者の専門性研究の課題を体系的に描き出し、調査研究でそれを具体化した上で、新たなアプローチの可能性を提示した意欲的かつ独創的な研究である。「生活の共同生成」論は、技術的合理性に基づく“即戦力”に傾倒しがちな保育・教育分野の経営論理を問い直し、「課題」生成主体としての保育者像もまた過度なゼロ・トレランス志向に一石を投じるものとして、社会的・実践的な問題提起ともなるだろう。一方で、「生活」概念などより精緻化が期待される点、提起された諸概念と現実の保育過程を結びつけて理解するには未だ調査研究が十分とはいえない点、調査協力先が主に幼稚園であり、保育所保育にも通用する議論であるかは慎重にすべき点等、いくつかの課題も指摘された。とはいえ、これらの課題は本論文の学術的価値を損ねるものではなく、むしろ研究の発展可能性を示唆するものといえる。以上より、審査委員一同は著者が博士（教育学）の学位を授与されるに値すると認めるに至った。